



**JAPANESE A1 – STANDARD LEVEL – PAPER 1**  
**JAPONAIS A1 – NIVEAU MOYEN – ÉPREUVE 1**  
**JAPONÉS A1 – NIVEL MEDIO – PRUEBA 1**

Tuesday 3 May 2005 (morning)

Mardi 3 mai 2005 (matin)

Martes 3 de mayo de 2005 (mañana)

1 hour 30 minutes / 1 heure 30 minutes / 1 hora 30 minutos

---

**INSTRUCTIONS TO CANDIDATES**

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only. It is not compulsory for you to respond directly to the guiding questions provided. However, you may use them if you wish.

**INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS**

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire sur un seul des passages. Le commentaire ne doit pas nécessairement répondre aux questions d'orientation fournies. Vous pouvez toutefois les utiliser si vous le désirez.

**INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS**

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento. No es obligatorio responder directamente a las preguntas que se ofrecen a modo de guía. Sin embargo, puede usarlas si lo desea.

次の 1 (a) の文章と (b) の詩のうち、どちらか一つを選んで解説を書きなさい。

1 (a)

「あんた、今年で幾つになんなさった？」

「四十二です」

「四十二？ ああ、そうですか」

道彦は無遠慮につづけた。

5 「すると、若くもないか」

「いや、若い、若い」

乙二が、またあわてて助け舟を出したが、一茶は道彦のひと言に胸を貫かれていた。みじめに沈黙したまま、冷えた茶を啜った。

10 神田に行つて人に会うという二人に広小路で別れて、大川橋を北本所に渡りながら、一茶は道彦に傷つけられた胸が、まだ痛むのを感じた。一人になって、傷口はむしろ傷みを加えたようだった。

乙二は常総の弟子のことを言ったが、道彦にはそれも笑止だったに違いない。なるほど一茶は常総をまわり歩いて句会を開き、句の添削もするが、一茶が行くところに集まる人びとを、弟子と呼んでいいかどうかはわからなかった。(中略)

15 明るい月がのぼっていたが、夜はまだ寒く、町を歩いている人は少なかった。人びとは家にこもっていた。明るい灯の色がこぼれている町を幾つか通りすぎ、横川と釜屋橋にかかる橋を渡ると、町の灯は急にまばらになり、不意に眼の前に広い畑地があらわれたりした。

一茶は堅川に沿った通りから左に折れた。まばらな町家の背後に、畑と僅かな雑木林に囲まれた社が見えてきた。鳥居をくぐって、人気のない境内に入ると、一茶は境内の隣家の米蔵とくつついている粗末な小屋に入った。

20 一茶は手さぐりで行燈をさがし、灯をつけた。三畳ほどの板の間に、古びた畳が一枚敷いてある。部屋の隅に大きくて頑丈な唐櫃が置かれ、煤けた羽目板には埃をかぶった小さな戸二張と飾り矢の束、天狗やひよつこの面などがぶらさがっていた。社の祭礼の時にも使うらしい古びた面は、虚ろな眼をひらいて入ってきた一茶を見おろした。その社の道具小屋が一茶の住居だった。

25 一茶は畳にあがり、小さな机の下から、朝の残り物らしい喰い物をひき出すと、背をまるめ、茶碗を鳴らしてしばらく物を喰った。それから入口に出ると、敷居に腰をおろして境内にさす月を眺めた。

飯を喰っている間は忘れていた道彦の言葉が、静かに胸に戻ってきて膨れた。誘われるままに、道彦や乙二に立ちまじり、いっばしの俳諧師づらで巢兆の家をたずねたことが悔まれた。

一茶は、いまは無名ではない。ある程度は江戸でも名が通り、巢兆とも面識があつた。道彦に誘われたとき、一流の人間に立ちまじる晴れがましい気持がなかつたとは言えない。だが水茶屋での道彦の言葉は、

30 一茶の名の通り方がどういうものであるかを示しているようだった。いつだつが上がるあてもない。旅  
 回りの二流の俳諧師さ、と人びとは陰で噂しているかも知れなかった。そしてそれは事実<sup>じじつ</sup>に違<sup>ちが</sup>い<sup>い</sup>なかつた。

—また、出かけねばなるまい。

と一茶は思った。金も喰い物もなくなっていた。明日の朝は、とりあえず成美<sup>なりび</sup>の家に飯を馳走<sup>めし</sup>になりに行  
 かねばならない。

35 不意に、過ぎた立春の日<sup>りっしゅん</sup>に出来た句が、胸に浮かんできた。春立つや、と一茶はつぶやいた。その句が、  
 胸に溢れた。

春立や四十二年人の飯

世を厭<sup>いと</sup>う気持が、一茶の胸を苦しくした。そしてまた、そういうときいつもそうであるように、かすか  
 な軋<sup>も</sup>り声をあげて心が少しねじ曲るのを感じた。だがその感<sup>かん</sup>覚<sup>かく</sup>は、東の間で終った。

40 一茶はくしゃみをした。膝を抱いて、頭から月に照らされたまま、動かなくなった。

(藤沢周平『一茶』一九八二年)

〈注〉 藤沢周平（一九二七～一九九七） 小説家。時代小説家（歴史小説）として人気がある。代表作  
 は、「隠し剣孤影抄」「用心棒日月抄」「蟬しぐれ」など。

一茶 小林一茶。江戸時代の俳人。

広小路 東京上野を南北に走る通り。

社 神社のこと。

— この部分の一茶の心情はどのように揺れていますか。他の俳人たちとの会話から、自分をどのよう  
 に考えていますか。

— 一茶の住まいの様子から、一茶の暮らしぶりや社会的な地位などが、どのようなものであったかを  
 うかがい知ることができますか。

— 一茶という人物を描くために、作者は語句や文体、表現などでどのような工夫をしていますか。ま  
 た、それはどのような効果を与えていますか。

1. (b)

卵のかげ

蔵原 伸二郎

みんなのこえが 天にのぼるのだが  
みんなのかなしみが雲になるのだが  
みんなの夢は風になるのだが――

5 天は光がまぶしくて  
かんがえることもできはしない  
どこまでふかれてゆけばよいのかしら  
いつまで待っても  
返事がこないのだよ どこからも

10 みしらぬ砂漠に小さな花がさいていて  
どこかの海辺にくらげたちが遊んでいる  
ばかり  
時間の中で月が小さくなってゆくのだ  
空間の奥で太陽も消えてなくなるのだ

15 卵のかげみたいに うす青く  
地球のかげが  
虚無にうつっているのは 美しいな

(蔵原 伸二郎 昭和二六年頃の作品。詩誌「雑草」に発表。)

(注) 蔵原伸二郎 (一八九九〜一九六五) 詩人。代表作に、「乾いた道」「岩魚」などがある。ほかに、「蔵原伸二郎詩集」 鮎書房一九四三年など。

――「どこまでふかれていけばよいのかしら」とありますが、「ふかれてゆく」のは、何であると思いますか。

――「卵のかげ」という語によって、詩人は何を表現しようとしていると思いますか。卵は何を象徴していますか。

――この詩の最後は「美しいな」という語で終わります。この語には詩人のどんな気持ちがかめられているのでしょうか。